

## 銀行労働研究会発行「ひろば」編集長

# 志賀寛子さんの思い出

### 「ひろば」編集長志賀寛子さん

元「ひろば」編集部田中均

当金融・労働研究ネットワークの前身である銀行労働研究会は全銀連（全国銀行従業員組合連合会）が発行していた「ひろば」（月2回刊）を継承していました。その「ひろば」を全銀連の時代から編集していたのが志賀寛子さんです。

私の高校時代からの友人で、ベトナム問題などを語り合った村上敏一君が、全相銀連の書記をしていて、全相銀連本部の隣の部屋が銀労研でした。銀労研をのぞくと、天井まで資料（大学や研究機関の紀要や銀行労組の機関紙）が積まれていて、まさに理論研究と運動の一体化組織がここにあったと感激。欠員ができれば紹介をと頼みました。（全銀連と銀労研について参照）

銀労研に電話して最初に話したのが志賀さんで、若々しい声が印象的でした。この出会いで、私の金融労働運動の人生が始まり現在に至っています。私が銀労研に入って、「銀行労働調査時報」の編集は大ベテランの泉谷甫さんと及川徹さん、「ひろば」を志賀編集長と田中が担当しました。

「調査時報」は計画的な編集で発行が遅れることはなかったが、「ひろば」は志賀さんも私もテーマに深入りし半月、1月遅れを繰り返していました。女性差別に対するたたかい、労働組合への不当な攻撃への反撃などの記事に加えて、私はサハリン上空でソ連戦闘機に撃墜された大韓航空機事件とか、パレスチナ解放機構駐日代表へのインタビュー、アフリカでの飢餓がなぜ起きているのかなど、金融労働運動の枠を大きく外

れる問題にも取り組みましたが、志賀さんに反対されたことはなかった。

今、全労連はアメリカのレイバーノーツとの交流を広げ、今年はシカゴのレイバーノーツ大会に39名を派遣。（青年ユニオンレイバーノーツ大会報告参照）レイバーノーツは1979年に結成されていますが、初期の1980年代に、木下武男先生（昭和女子大学名誉教授）が紹介されていました。このレイバーノーツの話志賀さんにしたところ「銀労研もそれを目指しましょう」と、いとも簡単に言われてしまった。

現在のアメリカ労働運動の盛り上がり、研究者集団と労働運動活動家の組織化の必要を考え、志賀さんの「私たちもそれを目指そう」を思い出します。そのときは私も若くて現実的な課題とは思っていませんでしたが。

### 「ひろば」第1号～第300号の復刻版

駒川智子教授が後出の「志賀さまに教えていただいたこと」の中で、志賀さんとの出会いが1961年に出版された「BG学ノート」だったと回想されています。同時期の「ひろば」は、第1号（1951年）から第300号（1964年）までの復刻版が2018年に刊行されていますが、「ひろば」が職場の特に女性に密着した内容であったことが伝わってきます。（「ひろば」復刻版刊行参照）

また、渡辺峻先生と秋葉泰子さんがイタリア、フランスへのツアーについて書かれています。ツアーで精力的に皆さんのお世話をされる志賀さんの姿が目につかびます。ツアーでは現地語に精通した通訳の方のお世話になったのですが、事前の連絡で急を要するときなど、「銀労研がイタ

リアのCGIL本部に電話をかける」と地銀連の御嶽さんに言われました。

地銀連の部屋から「ハロー、ハロー」と電話すると、「プロント、プロント」と応答がありました。英語で用件を言うと、慌てた声で「モメンタ、モメンタ」と返事があり、他の部署に回されます。そこでまた「ハロー、ハロー」というと「プロント、プロント」ときて「モメンタ、モメンタ」と返事。何回か繰り返してようやく英語の通じる方が出てきました。

その頃、私は子育てで戦争のただ中で、ツアーには行けなかったけれど、おかげさまで、イタリア語で「プロント」が「ハロー」の意味で、「モメンタ」は「just a moment＝少しお待ちください」らしいと知り、国際交流の片鱗を経験できました。

志賀さんは国際的なシンポジウムにも積極的に参加し、女性差別撤廃条約（CEDOW）の専門家が来日した際に、夜、もう帰宅していた私に「今、〇〇さん（女性）が△△ホテルにいるので電話をかけてコメントをもらってほしい」と言われました。面識のない偉い人に英語で電話は緊張しましたが、幸いご本人が部屋にいて「Hiroko Shigaのスタッフだ」と説明すると快くコメントをもらったこともありました。

文豪志賀直哉の姪で、母方も明治の元勳副島種臣家という家系の故か、本人の気質からかは不明ですが、こだわりのない大胆さに、近くで振り回される小人は冷や汗ものでした。

今回、3人の方から志賀さんの思い出を書いていただき、特に女性の方の受け止め方を再発見。女性差別とのたたかいを生涯のテーマとし女性を励ました志賀さんと「ひろば」を見直してみたいと思っています。

## 志賀寛子さんの思い出

渡辺峻（立命館大学名誉教授）

振り返りみれば、はじめて志賀寛子さんにお会いしたのは、約半世紀も前の1970年代の後半のことであった。志賀さんとは、それ以降の永いお付き合いであり、公私にわたり、種々のお世話になったので、思い出はあまりにも多い。

当時、大月書店より『現代企業のホワイトカラー労働』の刊行企画があり、このテーマに関心をもつ大学教員を中心にして、産業別に執筆が割り当てられ、私は、編者の指示で、谷田庄三教授（大阪市大）とともに、銀行業の労働分析を担当することになった。とはいえ、「銀行労働」についての知識は皆無であったので、なにはともあれ、東京南青山の銀行労働研究会のオフィスを訪ねることになった。

その時に、志賀寛子さんともども及川徹さん、泉谷甫さんにお会いした（田中均さんはまだおられなかった）。お三方とも、お仕事を中断して、応対して下さい、志賀さんのいれてくれたコーヒーをすすりながら、種々の貴重なご教示を頂戴した。それ以降、志賀さんをはじめ、銀労研の皆さんとの交流が急速に深まった。

おかげで、谷田教授との共著の論文も書き上げることが出来た。またそれを機会に、個人的にも「銀行労働」の研究にはまり、拙稿をいくたびも、銀労研の「銀行労働調査時報」や「ひろば」誌に掲載して下さい。また、拙著『現代銀行企業の労働と管理』（千倉書房）、『現代の銀行労働』（大月書店）を刊行することができた。志賀さんをはじめ銀労研の皆さんには感謝しかない。以下、思い出の断片を記しておきたい。

立命館大学には、学外の有識者をお招きして、短期集中講義をしていただく制度があったので、ある時、志賀さんに講義担当を依頼したところ、即ご快諾いただいた。大学の近くの宿に泊まっていたいただき、二日間の日程で、銀行業の女性労働をメインにお話いただいた、と記憶している。二日目の夜には、京料理を食べながら、種々歓談したことが、懐かしく思い出される。おそらく受講

生は、学内教員の講義では聞けない貴重な内容に触れて、多くの示唆を得たものと確信している（田中均さんにも同様の趣旨で講義していただいた）。

### イタリアツアーでの志賀さん

そのころ、銀労研は地銀連との共催で、数年に一度の頻度で、イタリア労働総同盟との定期的な交流会を持っていた。約1週間の日程で、ローマやフィレンツなどを訪問し、交流を深める旅であった。銀労研からは、志賀さんや野田正徳教授（法政大学）が参加され、小生もお供をした。地銀連からは、書記長の御嶽さんをはじめ傘下労組のメンバーが全国より参加していた。

総勢40名ぐらいだったが、志賀さんは、全体のお世話係のような役目を果たしておられた。参加者全員が、つねに同じ宿、同じ乗り物であったから、いつしか親しくなった。このイタリア旅行には、二度ほど参加したが、いつも志賀さんには、大変お世話になった。全行程を通じての志賀さんのあれやこれやのことが、懐かしく思い出される。

永い間のお付き合いで、志賀さんとは、しばしば、手紙や電話で相互連絡する機会があったが、生前最後にいただいたお電話のことは、忘れることができない。

志賀さんは、先年の早春にご主人を亡くされ、しばらくしてから、その連絡を、お嬢さまとの連名の書状で頂戴した。かねてより、おしどりご夫婦であると存じ上げていたので、中心いかばかりかと、すぐにお悔みのお花をお届けした。そして、折り返し、志賀さんより、お電話をいただいたので、改めてお悔みを申し上げ、しばし電話での会話が弾んだ。

「わたし、もう90歳を過ぎたのよ」と、志賀さんは、お元気そうにお話されていたので、「折を見て山梨にお伺いしましょう」と申し上げた。電話で、そんなやり取りをしたあとすぐに、ご主人の後を追うようにして、志賀さんが天に召されるとは、思いもよらぬことであった。訃報の連絡

を、お嬢さまより頂戴した時には、ただただ愕然とした。

いま思えば、あの時に、もう少し長電話をしておくべきだったと、そのことが心残りではあるが、志賀さんと交わした「最後の会話」「最後の電話」になってしまった。

## 志賀寛子さまに

### 教えていただいたこと

駒川 智子（北海道大学教授）

志賀寛子さんと、もうお話しできないのだと思うと、寂しくてたまらない。これまで、頻繁にお会いしていたわけでも、まめに連絡を取り合っていたわけでもないが、私の労働研究者としての人生の、働く女性としての生き方の、道標であったように思えるからだ。

### 『BG学ノート』とコース別雇用管理

私が志賀寛子さんを知ったのは、『BG学ノート』（上坂冬子・志賀寛子・加藤尚文共著、三一書房、1961年出版）を読んだ時だったと思う。志賀さんは、全国銀行従業員組合連合会（全銀連）の調査・広報機能を継承した銀行労働研究会（銀労研）に勤務されていて、『BG学ノート』で職場にはお茶汲みに象徴される男女間の封建的な人間関係があること、“職場の花”として“女性らしさ”が利用されていることを指摘していた。

本書を読んだ1990年代当時、私は大学院生で、銀行のコース別雇用管理制度が生み出す男女のキャリア格差に関心を持っていた。そして本書の出版から30年以上経っても同じ問題が残りつづける日本社会にめまいがしそうになると同時に、志賀さんがすでに女性労働者の困難を生む職場の構造的問題を鮮やかに切り出していることに感銘を受けた。

今でこそジェンダーの視点は労働のみならず社会科学の分析に不可欠とされるが、私が研究を始めた頃はまだ主流ではなく、私は志賀さんの文章に男女格差を生み出す構造への眼差しと

いう、労働研究をするうえで必要な社会の見方を教わった。同時にその志賀さんが銀行へ初めて出勤する前の晩に、当時の言葉でいうサラリー・ガールになるのがなんとなくいやで一人でシクシク泣いたと『BG学ノート』に記しているのが、なぜか心に残りつづけた。

表参道にあった銀労研の入る建物には、銀労研が発行していた「銀行労働調査時報」（月刊）や「ひろば」（半月刊）の1950～60年代の古い冊子を読むために一夏通い続けた。読んではノートPCにひたすら入力する私を、志賀さんは昼食に連れ出してくれたり、時には近くのお店へ夕食に連れて行ってくれたりした。食事が出てくるのを待ちながら志賀さんが話してくれることは、チャーミングな志賀さんらしい楽しい話が多く、また共感して、さらになるほどと思う話も多かった。

そんなある日の夜、注文を取りに来た店員さんと二言三言にこやかに話したと思ったら、「夜に一人で食事をとるなら、顔なじみのお店があったらいいでしょ」と、私にささやいた。女性が一人前に働いていくうえで、仕事が夜遅くまでかかることは無いわけではない。しかし空腹になったとしても、女性が一人で夜の街で食事をとるのは、店を選ぶのも入るのも勇気がいる。安全なのか、安心できるのか、といった不安が過るのである。

だったら買って来た物を机で食べるとなるが、それが続くと今度は空しくなる。ならば、自分にとって快適な行き付けの店を作ろう。そんな働く女性の知恵と想いがギュッと詰まった言葉だった。私はその時の志賀さんの表情を忘れない。ちょっと寂しくて、でも覚悟や責任が感じられて、「今の日本で女性が働くとは、こういうことなんだ」ということが、一瞬にして感じ取れた。働く女性という人生の先輩として、私に生き方の一端を見せてくださったのだと思う。

志賀さんが私に教えてくださったことを思い出すと、感謝の気持ちでいっぱいになる。だから今度は、私が人生の後輩に伝えてゆく番だと思っている。

## 志賀寛子さんの思い出

### 秋葉泰子（元日本信託銀行労組）

志賀さんとお知り合いになったのは、いつだったのだろうかと考えました。

私は1959年に都立高校を卒業し、日本信託銀行に入社し、労働組合員にもなりました。当時の労働組合は労使対等な労働組合は認められず、低賃金と物価高騰から生活を守るために、それまでの「お伺い」から戦う組合へと変化している時期でした。

労働組合のことなど何も知らずに入った私でしたが、仕事が終了後、職場懇談会が活発に開かれ、1959年8月には婦人部も結成され、生理休暇や産休も就業規則に新設され、入社した年の12月には、全国一の高校初任給を獲得するなど、生き生きとした労働組合と職場でした。

そんな組合を弱体化させようと、会社は、1960年に正副委員長の非組合員化を狙った昇格を提案。それを拒否したところ、二人を不当にも解雇。解雇撤回闘争に立ち上がる労働組合を弱体化させようと、第二組合を結成させ、以後、第一組合員を徹底的に差別し、新入社員はすべて第二組合員となる中、労働組合は少数組合になりながら正副委員長の解雇を撤回。

### 銀行本店前で100日間の座り込み

其の後、第一組合員に対する不当な差別賃金をなくすため、日本橋本店前で100日間の座り込みをし、組合員差別をなくすことができました。同時に他の金融機関では、当時なしえなかった男女差別賃金も大幅に改善させ、その成果を知った多くの女性たちが、「男女差別賃金をなくす連絡会」を結成し、定期的に交流し、励ましあいながら、職場の男女差別に取り組み、成果をあげていきました。

そんな折、いつも戦う女性たちを励まし、中心になって力を尽くして下さったのが、当時、銀行労働研究会にいらした志賀寛子さんでした。青山にあった全銀連会館で、{連絡会}を開き、銀行労働研究会で発行する、「ひろば」などでたび

たび取り上げ、戦う労働者、特に女性たちをどれほど励まし、戦いにたちあがらせてくれたことか！

1984年11月には、金融労働者のイタリアツアーがあり、志賀さんと一緒にイタリアルネッサンス街道とパリ、ウイーンの旅を楽しんだことを、当時の写真を見ながら懐かしく思い出しています。

当時ヨーロッパでは労働運動が盛んで、ローマにあるイタリア労働総同盟（CGIL）、パリではフランス労働総同盟（CGT）を訪問、見学、交流をしましたが、志賀さんが交流会で、沢山さん質問をされたことを思い出します。

志賀さんが、吉祥寺の井の頭公園のすぐ傍に住んでいらした時、志賀さんの家にお邪魔したことがあります。洋風でも和風でもない落ち着いた素敵な家に魅了されました。設計したのは志賀直哉の弟であるお父様とお聞きしました。

私が武蔵境のマンションに住んでいた時、時々銀行時代の仲間や知人たちと、ピアニスト鶴巻裕子さんや、パリに留学したという、フランス歌曲をうたう故佐々木あつみさんをお願いして、ホームコンサートを開いていましたが、志賀さんはいつも参加してくださいました。

私が50代で大病をして休職中、志賀さんも時々お世話になっているという、井の頭公園のすぐそばにある鍼灸の有名な先生を紹介して下さい、お陰ですっかり元気になり、職場復帰を果たすことが出来ました。

志賀さんが山梨の牧丘に引っ越しされてから、男女差別賃金をなくす連絡会の仲間と2回ばかりお邪魔しましたが、いつも趣味の良い民芸風のお宅と、自然あふれる環境に、吉祥寺も良かったけれど、ここも良いなあと、思ったものです。

2回目となる訪問は、志賀さんの米寿を祝うためでしたが、少し背中が丸くなっていらしたものの、相変わらず若々しい声で、80歳を過ぎてから取得した運転免許とのことでしたが、駅まで自らの運転で送り迎えしてくださいました。

東久留米の我が家のそばに、羽仁もと子と吉一夫妻が創立した自由学園があるのですが、志

賀さんは自由学園出身で、初等部から、吉祥寺の家から中央線で武蔵境まで行って、駅の前に預けてある自転車に乗って、毎日通っていたと聞いて、びっくりしました。

今は亡き私の夫も、日本信託銀行の労働組合の活動家でしたが、志賀さんが日銀に勤めていらした頃から、知っていたようです。

生前、志賀さんから電話があつて、自由学園の同窓会があるので、その帰りに我が家へいらしてくださいとのことで、夫もとても楽しみにしていたのですが、帰りが遅くなり、お会いできなかったのはとても残念でした。

志賀さんが山梨にいらしてから、時々電話でお話したり、何かおいしそうなものがあるとお送りしたりしていましたが、志賀さんからもお手紙と一緒にワインやブドウ、干し柿など送られてくるので夫も私もとても楽しんでいました。志賀さんを思い出すと、懐かしいことばかりですが、最後までご主人と一緒に生きることが出来て、お幸せな人生だったと思います。

志賀さんのことは、私の若いころの思い出とともに、一生忘れないでしょう。

2024年5月記